

現うつつの綺羅星

私は鬼である。鬼といえば人を喰う悪鬼を思い浮かべるかもしれないが、日本における原初の鬼とは、神山しんざんから生まれる良鬼である。神山が霹靂へきれきによって碎け、散り散りになって山肌を転がり落ちる最中、鬼へと生まれ変わる。それは地の精霊ともいえる純粋な生命体であり、人を喰うことはない。

その神山しんざん生まれである私は、とある山神やまのかみに育てられ、一人前になると側仕えをする神使しんしとなった。神使といえは狛犬こまいぬ、狐、白兔——時に鯰なますや亀の神使がいる。それぞれに伝承があるが、鬼の神使についての伝承はない。一千年以上前のことだが、鬼という言葉は、災いや邪気を象徴する依代よりしろとなった。以来、どんな良鬼にも悪評が付きまとい、節分には豆を投げられる始末。仲間もみな人との縁を絶ち、日陰者となる運命を受け入れた。人前に姿を晒してはならぬという不文律ふぶんりつが浸透し、神に仕える私は一層のこと、出自を隠さねばならなかった。

本来ならば、百そこそこで山の中に死んでいくのが鬼であるが、私の寿命が伸び続けているのは、神の傍かたわらで過ごしているためだ。八百年ほど前に最後の友を見送って以来、私の出自を知るものは神のみとなった。山河、風雲霧、日月星じつげつせいなどの雄大な自然は長寿であるが心を持たぬため、抛り所にするには侘しい。心を鎮めるための読経をきっかけに、私は人間が記した書物を読むようになった。漢詩、随筆、歌物語——その中に、友について記された説話を見つけた。人前に姿を晒せぬはずの鬼が、人間の手記によって息を吹き返している。紙上の墨となり生命を継がれた鬼の姿……。私は書物にのめり込んだ。人間は千々の思いを書きつけることで、限りある生命を留めおき、心をおさめる習いがあるようだった。人間が編んだ書物の懐は深く、長寿の孤独も和らぐような気がした。とりわけ魅了されたのは、和歌と呼ばれる三十一文字みそひともじの詩である。言葉少なに切り取られたその詩の中には、静かな光が宿っているように感じられた。

小野小町の名歌に、褪せてゆく花の色を、衰える美貌に重ねたものがある。自然のうつろいを心や体と同一化させることは、和歌ならではの美意識だ。和歌を詠む時には、己の心を眺め、その真髓へと言葉の矢を放つ。進みゆく言葉とともに瞳を閉じれば、己のすがたも世のすがたも、地を越境し天を仰ぐ自然に回帰していくことを感ずるだろう。大いなる自然の円環の中で、あらゆる魂は巡りゆく。天地のあいまいに生まれ落ちた人間が、自然という神々をも纏まとわせて己の生命を詠えいずることは、まるで祈りのようではないだろうか。

私は神使^{しんし}として一千年近く、祈りに関わる仕事をしている。神前に列を成す人間は天に向かって柏手を打ち、祈りを捧げる。二度の破裂音が空^{くう}に打ち震えると、あの無意識の裂け目から、祈りの中へと入り込むことができる。湧きおこる風筋^{かきすじ}に吸い込まれていくと、あるひとつの宙^{ちゆう}へ達する。そこに吹く風は満ちすぎていて、目を開けていることができない。まるで眼前の恒星かのような、満ちきった生命の真髓が迫ってくるのだ。私はこの光に、魂という言葉が浮かび上がってくることを感ずる。

もの思へば沢の蛸も我が身よりあくがれ出づる魂^{たま}かとぞみる

『後拾遺和歌集』 雑・六

和泉式部

拙訳　もの思いに耽つてみると、沢を飛び交う蛸のすがたもふらふらとこの身を抜け出した魂のように見える

明滅する蛸を魂^{たま}に喩えた、和泉式部の名歌である。西洋の書物によると、世界の全ては「地水火風^{ちすいかふう}」という四元素から為るそうだ。地に生まれ、水中を漂い、火となつて、風を孕む。蛸はその四界^{しかい}を循環する。昆虫という制約の中で自然を巡り、生命を継ぐために天地のあわいを光る。それは一篇の祈り、一首の和歌が、言葉という制約の中で生命を託され、光を放つことにも似ている。

この和歌では魂が「あくがれ出づ（ふらふらと抜け出す）」と記されているが、本当にそうであろうか。書くことにより紙上に保たれた沢の蛸は、死後なお失われぬ美しい魂として一千年の時を渡っている。和歌という祈りは、たった一つの生命を書き綴じ、自然に回帰しながら時を渡る光。大いなる円環からこぼれ落ちるように流れた音韻として、遙か昔より紙上に棲^すまう、現^{うつつ}の綺羅星である。

さて、肥前の温泉街より、回廊金魚が文学遊戲の知らせを寄越したのは水無月のこと。出自は問われぬということで、鬼の私もひまをみて筆を取った。ついぞ人前に姿を晒してみたわけだが――、如何であろうか。こちらとしては、前時代的な不文律^{ふぶんりつ}に反抗してみるのも悪くないといったところ。ふと魂という文字を眺めれば、鬼が云う、と象られており奇妙な心地がする。こうして硯に向かい、千々の思いを書きつければ、一千年の孤独も少しばかりは小気味よいものと為るであろうか。

人間もすなる日記といふものを鬼もしてみむとてするなり。